

四月二十九日、叙勲の栄に浴し、勲六等単光旭日章を拝受いたしました。また昭和四十一年九月二十日、保護司を拝命、以後三十二年間、更生保護事業に貢献したことにより法務大臣表彰の栄にも浴しました。

この内助の功として妻も全国保護司連盟会長より表彰状を受賞することができました。

その他に行政相談員、村土地改良区、森林組合等の監事として、さらには村社会福祉協議会理事として会長職も勤め上げて今春退任し、現在には恩給欠格者連盟熱塩加納支部監事として、欠格者処遇の万全を期されるよう県連会長に強く要望しながら会員と共に頑張っておるところであります。

終戦前後

十八カ月の体験記録

山形県 梅津儀操

一 出征

私は大正十四（一九二五）年一月二十五日、梅津家の長男として生まれ、家族は両親、祖母、妹四人、第一人の九人家族で、専業農家でしたので学校を卒業すると農家の後継者として食糧増産に励んでいました。大東亜戦争も日を追う毎に拡大し、男と言う者の大半が兵隊として出征して行きました。そのため兵隊検査年齢も繰り下げられ、二十一歳にならない私達にも徴兵検査の通達が来て、昭和十九（一九四四）年七月には検査だつたと思います。しかし私は近視のため第一乙種合格となり、その後同級生の甲種合格者になった者たちの入営送別等に激励していました。

昭和二十年四月、沖繩戦の二カ月前の二月三日、

私にも遂に召集令状が送付されてきました。集合同所は、東部第五十九部隊の駐屯地（現在の山形市霞城公園）出発は二月九日でした。一週間しか無い。母は私の服装やら千人針やらで大忙しの日々で、この年の二月は降雪量が多く、屋根から下ろした雪が下屋よりも高くなり、雪の片付けが大変なころでした。

当日家の前庭で、部落区長（安部久吉氏）はじめ、隣組、親戚、友人等多数の見送りを受け、私の挨拶、部落区長さんの壮行の辞と万歳三唱で出掛ける時、玄関で見送っていた祖母と母が涙ぐんでいた姿が、六十年経った今でも脳裏に浮かんできます。成長した孫を、息子を御国のため奉公できることの喜びの涙か？ 二十歳まで育ててもう二度と会えず帰らぬかも知れぬ我が子、我が孫を取上げられることへの悔し涙であったのか？

私が青年団長当時、寄付を集めて作られた出征兵士を鼓舞するための音楽隊に送られて、米坂線

の萩生駅を八時五十分発に出発、沿線各駅より集まって来た仲間と一緒に山形駅へと向かいました。山形駅へ着いたのは十二時頃でした。山形駅では各方面から集まった出征兵の仲間と一緒に、北満第一八一部隊から迎えの下士官に引率され、私は第四中隊の兵舎へ入りました。軍服が支給され兵隊らしくなりました。毎日の日課は点呼、体操、駆足、程度で、後は身体検査、予防注射の一週間でした。

二月十六日午前九時、出発命令が出て山形の霞城正門下を通る奥羽本線上りの軍用列車に乗りました。列車は隠密裡の行動のためか山形駅からではなく正門南から仮設の階段を降りて乗車しました。総員三百人位でした。行く先は北満州のハロシマリシヤン第一八一部隊駐屯地と告げられました。引率は第六中隊長秋山中尉他数人の下士官でした。

十二時頃、軍用列車はゆっくりと発車、南へと向かって走る。時々大きな駅に停車するとホーム

へ降りて体操をさせられました。やがて列車は東京、名古屋、奈良、大阪、さらに西へ、左手にきらきら輝く瀬戸内の海を車窓に見ながら広島を通り下関へ着いたのが二月十九日の夕方でした。下関港より関釜連絡船に乗船、冬の玄界灘で荒波に揉まれ、船酔いで苦しんだことは今でも忘れることができない程でした。胃袋の中のもの全部吐き出し、船底に這いつくばったものでした。ようやく八時間の乗船を終えて釜山へ上陸、日本の鉄路より幅広い鉄道に乗り、朝鮮半島を釜山より大邱―大田―京城―平城―新義州と縦断し、鴨緑江は真夜中の通過で随分長い鉄橋だなあと感じました。いつ渡り終えるかと思つた程です。

約一昼夜半かかって朝鮮半島を走り、鮮満国境を通過し、満州へ入り、安東から奉天―四平―新京を通り白城子を経て荒漠たる高原地帯を北へ北へと走り、大興安嶺を越えて目的地ハロンアルシヤンへ着いたのは二月二十四日であつたと思う。

我々第二大隊は軍用列車を下りて徒歩で二キロ

位に在る大隊本部の広場に到着する。大隊長の訓示が終わつて各中隊毎に編成され、普通の外套と皮靴が支給されました。

ここは高原地帯で標高一七五〇メートルとかで、寒さは厳しく、じつとしていては寒いので足踏をしながら耐えていました。終わつて各中隊の兵舎に入りました。兵舎内はペチカがあり、石炭が焚かれ、上着を着なくても暖かく、外の寒さとは対称的でした。とてつもない寒い所へ来たものだと思ひました。

二 軍 務

兵舎に入ると各内務班ごとに分けられ、今度は防寒外套、靴、帽子等が支給され、これから一日の日課について班長より説明される。朝の起床は午前五時、起床と同時に点呼、訓示を受けて次に体操をして終わりとする。

凍傷を防ぐため少しでも動かなければならない寒さです。終わつて兵舎に入り掃除をする者、朝

食の食缶を取に行く者、要領の悪い者は便所掃除
でした。

二月三月は積雪酷寒のため外での訓練教育はほとんど無く、一週間に二回程駐屯地より二キロ位の所にある温泉に連れて行かれました。満州の地で温泉に入れるなどは夢にも思つて見なかつたので何よりでした。

また軍隊での内務班では私的制裁が厳しいという事を聞いてきたが、我々の中隊ではここはソ連軍との国境にも近いことで、初年兵も即戦闘要員として必要視されていたのか私的制裁は一度もなかつた。これは中隊の古年兵にも恵まれたことも一因であつたと思う。四月下旬から五月に入り外での訓練は蝟壺を掘り、この中に身を潜め、爆弾を持って敵の戦車の腹の下へ飛び込む練習が専らでした。

五月下旬には、一期検閲が連隊本部の在る「イルセ」で行われ一等兵となりました。間もなく大隊本部より二〇キロ程離れた国境監視勤務を命ぜ

られ、五、六人程の同年兵と共に派遣されました。途中は一面高原地帯の花畑でした。遠方の方に煙が見える。なんだろうと思つたら草原を焼く野火の煙で、何日も燃え続けるとのことでした。

監視所は国境線を赤色はソ連、白色は日本と、「三〇センチ角」の標識が建てられています。そこから双方二キロ程手前の高い丘に監視所があり、百倍の双眼鏡が台座に取り付けられ、刻々と映る敵の状況を本部へ報告していました。

当時隊員は五、六人程で二十四時間勤務、夜は周辺を動哨として警戒していました。ここ満州には狼が出没するので、真夜中の動哨中には全山の狼の遠吠えやノロの爪音に驚かされました。銃を持っているとはいえ、余り気持ちの良いものではありませんでした。

そこから丘を下る両側の通路には鉄条網が張られ、一キロの所に詰め所、分哨があり、交代要員として二十四時間交代で立哨し勤務していました。夜中、詰所の周辺には多数のリスがいて炊事場の

食べ物を盗食していたのが思い出されます。食事は第一線の給与であり私の体重も常に六〇キロ程だったのが八〇キロ近くにも肥えたのもこの勤務の頃でした。

七月下旬ともなると戦況は日増しに悪化し、私たちのソ連国境近くには大部隊のソ連軍が集結、また戦車の数も増えて、今にも国境線突破の様相が濃厚となって来ていたのでした。

三 転属、終戦

七月三十日頃、新設部隊編成のため、同年兵數十人が南満州の浚市宮ノ原満州第三七二二一部隊前原隊に転属となり玉川中隊に所属となりました。この隊は主として現地召集兵の方々で年齢も最高四十五歳の高齢層でした。

兵舎も仮の建物で、未完成の鉄筋コンクリート四階建ての屋根付きで、床面積は八〇メートル四方程の大きな兵舎で部隊全員が入っていました。我々転属組の現役兵は主に兵舎周辺の警備をして

いました。

八月九日、ソ連軍は、遂に国境突破の通報が入る。次々と主要都市を制圧しつつ奉天に突入したとの連絡を受け、部隊駐屯地近くの山に陣地を構築し、各人の蝟壺を掘って銃を構え、明日はいよいよソ連軍を迎え撃つべく決戦体勢に入りました。この時八月十五日午前十二時頃、上官より終戦の報を知らされました。全員ただ唾然として日本の空を凝視したのでした。やがて上官の命により部隊兵舎へ引き揚げとなりました。部隊に戻った我々は部隊長から玉音放送、無条件降伏、終戦の報を告げられました。

これによって部隊は解散、現地召集者は帰宅することとなり部隊は解散となりました。

我々内地召集者は帰るところもなく、ソ連軍の武装解除を待つこととなったのですが、二日程してソ連軍の命により治安維持に当たるようにとのことで、部隊長以下四百人程は、そのまま武器を持って残留することとなりました。

その後九月九日、武装解除まで二十五日間、駐屯地周辺の暴動の鎮圧、掠奪等の警備に当たりました。

特に宮ノ原駅の警備には毎晩出されました。北朝鮮から護送される日本兵は日本に返すと言われていましたが、シベリアへ連れて行かれる事には大衆心理からか貨車の扉を開けて逃げたらと言っても逃げようともせず、ソ連兵から「ダモイ」と言われ家に帰れると思いつい何の抵抗もせずシベリアへ送られて行ったのでした。そして彼らは長い年月、苦難の道を歩むこととなったのです。そして九月九日午前十時、我々四百人には武装解除の日がついに来しました。

私はこの日の来るのを予期して警備中に日本人住宅に出入りして懇意になっていたことから「私達の所へ逃げて来なさい、匿ってあげるから」と親切に言われていたので入隊以来一緒の仲間と三人で逃げる方へ入りました。

四百人の中、二百人程が逃げ、部隊長以下二百

人程が武器を渡してシベリア行きを覚悟の上、宮ノ原駅へと向かったのです。我々逃亡者は白昼日本人住宅へ行く訳にもいかなないので、ひとまず夜になるのを待つことにして、兵舎裏の雑木林へ身を潜めるため奥深く入り込みました。

これを察知したソ連兵は、我々が以前屋上に設置しておいた一連三十発の重機関銃にて乱射して来ました。幸い林の中には直径七〇センチの大木が所々にあったので、これに隠れて難を免れたのでした。やがて日も暮れ、夜陰にまぎれ日本人住宅へ入ることができ、四、五日匿ってもらうことを頼み、昼間は屋根裏に潜み、二回程ソ連兵が捜しに来たが運良く見付からず、その後は捜索には来ませんでした。

三 重光京子さんとの出会い

重光京子さんの夫、四郎氏は元満鉄幹部社員でしたが、昭和二十年七月現地召集となり、牡丹江へ派遣され、ソ連軍の参戦により激戦となり、生

死消息不明の状態とのことでした。留守を守る京子さんは三歳の男児がおり、二十六歳の母親と言うよりは世話好きのおばさんと言った感じで、身寄りの無い我々の仲間が大勢お世話になったのでした。

私もずると世話になり、翌年日本へ引き揚げて舞鶴港で別れるまで一緒でした。我々には働かずただ世話になることもできず、軍服を捨てて一般人の服装で職捜しに出掛け、九月いっぱい、ソ連軍の使役に従事して軍票稼ぎをしていました。当時ソ連兵は計数観念に乏しく、全く無知で、日本軍から取り上げた腕時計を十個も腕に掛け、しかも時計の読み方すら分からず、また万年筆を胸のポケットいっぱいにして喜んでいたのでした。

また娘と見れば満人、日本人の区別無く押さえ込んで強姦はするやら「ロバ」まで押さえ込んでいたとの話もあった程恐れられていました。それ故に日本人女性を髪を切り男装していたのでした。日本の施設、機械、武器、その他の物資と抑留者

をほとんど自国へ送ったのです。そしてソ連兵は間もなく本国へと引き揚げて行きました。入れ替わりに八路共産軍が軍政を敷き、第十六軍司令部が宮ノ原に駐屯することとなったのです。

五 地下三千メートルの炭鉱夫

この頃から私は戦友の佐藤、後藤等と共に元満州本溪炭鉱に就職をしました。ここは北満の気温とは違い内地の山形の冬の寒さの程度で、積雪は少なく雪は少々あった程度と記憶しています。本溪炭鉱は昭和九年に大爆発があり、満人二千人、日本人四十人が死亡すると言う大惨事のあった炭鉱と聞いていました。私達は早速炭鉱へ案内され、トロッコに乗り、四五度程の下り坑道がありました。そこからまた千メートル下りると横坑道、また千メートル下りた地下三千メートルの所で採炭が行われているのです。勤務は十二時間交代で、私達日本人グループは幹線班（坑道の修理）でした。

体が真っ黒になることは無かったのですが真っ暗な穴の中で電灯一つで落石の排除、坑道を支える支柱の交換、及び補修などいつ坑道が崩落するかも知れない命がけの仕事でした。十二時間の就業から終わって坑道から出て来たお互いの顔は皆真青であったことが思い出されます。それでも一カ月半程弁当持ちで宮ノ原駅から本溪駅の間を無賃乗車で通勤していました。

六 八路共産軍入隊

その後、知人の小山さんという人から八路軍の電話隊へ入らないかと勧められました。全く知識が無いからと断わったのですが「大丈夫だ、心配するな、八路軍の兵隊よりは分かるから」と再度すすめられ、十二月上旬から翌年の五月頃まで入隊することとし、炭鉱の仕事をやめて通勤隊員として籍を置きました。

待遇は将校待遇で、給与も高給を貰い、お世話になっている重光さんに大変喜ばれました。日本

人だけで組織された隊員は十二、三人程で、技術的知識を持った四十歳前後の経験者が五、六人いましたので、我々未経験者はこれらの人の助手として働いていました。遠くへ二、三泊で出張したことも度々あり、この時は護衛のため八路軍の兵隊十人程が付いて行ったものでした。

仕事の内容は単線仮設の延長、また切断された電話線の補修、電話器の修理等で、架設されたケーブル線の接続、半田作業などの助手となり、高架線の籠に乗せられたこともありました。食事は昼と夜が給食で、一カ月に二回位および祝日には、味付け豚肉が大皿に盛られ、新春には中国料理が腹滿杯に食べることができました。この頃からパイチュー赤唐辛子の辛味も苦にならず食べたものでした。

八路軍の軍紀は非常に厳しく、住民に対する掠奪、暴行、婦女子への痴漢等は厳罰に処せられたとのことでした。

ある時、司令官の部屋の電話機修理に呼ばれて

司令官室に入りますと、十畳程の部屋に八路軍の軍旗が立ててあり、椅子に腰掛けた司令官の机の上には書類も無く、全く殺風景なものでした。歳の頃四十歳前後か、これが八路軍の司令官かと思つたものです。修理も終わり故障の原因を片言の中国語で話しますと「何ですか」と日本語で言われます。

打ち解けて話をしますと、彼は日本の大学を卒業したとのことでした。多分毛沢東か周恩来を慕つて入隊したものかと思いました。

電話の仕事も一人前に覚え、定着した職になりますと祖国のこと、我が家のことが頭に浮かんできました。四月に入ると、国府軍（蔣介石軍）が満州に進攻して来るとの情報が入つたのです。

そして五月の上旬頃になると八路共産第十六軍の部隊が移動し始めたのです。

その頃から八路共産軍と国府軍との衝突が満州の各地で伝えられ、宮ノ原の八路軍も近くの山に陣地を構築し始めたのでした。これは危険だと思

い駐屯地から逃げ出す者も出て来て、私も脱出して日本人住宅街へ帰り様子を見ることとしました。

遂に国府軍は宮ノ原に進攻、二、三百メートルの山頂に陣取る八路軍へ攻撃の火蓋が切られ、まず戦闘機による爆弾投下、大砲による攻撃が開始されました。約五、六時間の戦闘で戦力に劣る八路軍は陣地を捨てて後方へ敗退を余儀無くされたのです。八路軍の宮ノ原敗退後、国府軍が統治者となり、治安も徐々に回復していきました。

七 引揚準備

いよいよ日本人の引揚げの準備調査が行われしました。当然引揚げとなると家財の処分等を考えねばなりません。裸同様の我々は別として、知り合の現地人と呼んで処分したり、市場に持って行き売りさばいたりもしたようです。私もリュックサックに衣類を入れ、市場へ持って行った時、現地の狡猾な手段で剥ぎ取られ、ほとんど売らずに帰ったことなどもありました。

これに懲りた我々は、彼らの魂胆を警戒して、一品ずつ代金引き替えて渡す方法で、絶対手から放さず売り歩いたのでした。また食物を求めて二〇キロ位遠くの集落へ一日がかりで行き、衣類と粟や高粱を交換に出向いたこともありました。

六月になり私達が世話になっていた満鉄社員マシオンを明け渡すように命ぜられ、満州労働者の空室に移るようになりました。生活必需品をまとめ、土壁造りの幅九尺×長さ三間程のオンドル式の小屋に入りました。その後、国府軍の武装兵士が二人来て、我ら若い男性は国府軍の使役にすると命令され、仲間五、六人が連れて行かれる羽目となりました。

汽車に乗せられ本湊湖の先まで行き、そこからさらに右手の山の方へ時々休憩をしながら国府軍の部隊と一緒に行きました。三昼夜程奥へ奥へと行軍して薄暗くなった頃、小山の麓へ辿り着きました。満人の空家に入れられ仮眠せよと言われ、山の上では散発的に銃声が聞こえる。その中疲れ

ているので寝てしまいました。

どの位寝たのか物凄い銃砲に目を覚ますと、何と負傷者が担ぎ込まれて来るし、死骸も二、三人転がされています。外に出て見ると山の上は物凄い火花と銃声です。そして枯草でも燃えているのか真つ赤に夜空を染め激戦の様子でした。大変な使役に来たもので、夜明け近くになり銃声は散発的になって朝食が届けられて来ました。昼頃になって八路共産軍は遠くへ逃げ去ったとのことでした。

銃声も聞こえなくなったので、いよいよ我々の出番となり、三人程の国府軍の兵士に連れられて担架を持って山頂へ登りました。見たものは一面の焼野ヶ原となった丘陵地帯に丸裸、黒焦げの死体がゴロゴロしています。その中から国府軍関係の死体だけを拾い集め、担架で担いで、山の下の畑へ下ろす仕事でした。

未だ頂上付近には虫の息の兵士もいましたが、八路軍兵士だから手出し無用とのことでした。同

じ民族同士の争いですが、これほどまでに無情なものかと、日本の過ぎし戦国時代も同様だったのかと思ひ合わされました。

畠の片隅へ下ろした死体は農夫に依頼して土饅頭を造らせるとのことでした。夕食後また八路軍の逃げた方へ進撃すると言い、当然我々も従軍させられました。野戦食の大豆煮で強行軍させられ、その上、下痢して体が持たぬと思ひ、入隊以来の仲間三人で相談をして隊伍から抜け出すことにし、休憩の時を見計らって隊伍から離れると「シヨマナ、アベンチュイラ」と言われ、用便だと言うと許されて木陰へ入りました。

進軍が始まると三人は「行くぞ」と合図して、その場に佇み、隊伍が行き去り、遠のくのを見て、元来た方向へ戻りました。他の二人とも途中で出会って、鉄道の線路を目指して歩いたのです。

食事は現地人の住居に行き高粱飯等を分けて貰って、なんとか飢えを凌ぎ、夜間集落の入口で国府軍兵士七、八人程が焚火をして暖まっている所

へ出食わしました。しかし国府軍は連戦連勝でしたので「我々はもう帰っても良いと言われたので帰って来た」と言うと、別段咎められることもなかったです。休み休みしながら四、五昼夜歩き続け、ようやく奉天へ向かう鉄道へ辿り着くことができました。

後は駅から汽車に乗れば良いので出掛けてから八日目の昼過ぎに無事帰ることができたのです。そして日本人街の重光さん宅へ寄ったら「よく生きて帰れましたね」と喜ばれました。私も考えて見ると第四回目の命拾いをしたことになりました。

八 引揚帰国

残留邦人の引き揚げについて本格的な調査が始まりました。我々も当然残留者と言うことで申告をし、荷物の整理と準備をしました。荷物を入れるリュックサックを作ったり、衣服を作ったり、リュックに入るだけの荷物と手荷物が全財産でした。いよいよ六月二十六日出発との知らせを現地

人の部落長から受けました。残った財産の処分等を託して、世話になった礼を言って、宮ノ原駅へ向かいました。各方面から集まった数百組の引揚者で駅はごった返していました。やがて乗車の指示が出て手荷物を持って車中の人となりました。宮ノ原駅から本溪湖、奉天（瀋陽）、錦州、錦西から葫蘆島へ着いたのが六月下旬でした。ここで身体検査、消毒、とくにシラミ駆除のDDTを胸元から散布されて衣服は真っ白、匂いが鼻を突きまです。それが終わるといよいよ乗船となりました。

迎えの船はアメリカの貨物船で船底へは梯子で下ります。だだっ広い倉庫の部屋で区切りも無く所々に柱があるだけ。下り口から差し込む明かりだけの暗い船底、板敷の上に各自手荷物の毛布を敷き、寝ころび、三度の食事の時と用便の他はゴロゴロしているだけでした。後で分かったのですが、ここはコロ島の港でした。

数時間停泊の後、輸送船はゆっくり動いているようです。日本へ着くのはいつ頃かと思った程で

した。数日して陸が見えると言うので甲板に上がって見ると、もう舞鶴港に入っていたのでした。懐かしい祖国へ無事帰ることができたのかとじつと胸の熱くなるのを覚えたのです。

我々の輸送船は停泊したが中々下船の許可が出ない。結局、検閲のため五日間、船底に閉じ込められていました。七月十三日ようやく下船の許可が出て下船することになり、私は重光さんと三歳の坊やのリュックを背負い、手荷物を持って棧橋を降りました。直ちに宿泊所へ入れられます。私は引揚者と言っても元軍人の復員兵であることから米軍から事情聴取を受けることとなり、日本語の話せる二世の下士官に北満での状況、特に開戦当時のソ連軍のこと等も聴かれました。

七月十六日、郷里の駅までのキップと満州国発行の紙幣を日本の金に替えて貰い、重光親子は九州（大分県姫島）へ、私は東北へと別れました。

舞鶴線に乗り綾部駅へ、綾部駅では婦人会の皆さんから湯茶の接待を受け、初めて緊張感から開放

された気分になりました。

綾部駅からは山陰本線で京都へ、京都では時間の待ち合わせの関係で、市内の寺社へ参詣したところが記憶にあります。京都から名古屋、静岡を通り熱海、川崎、東京と焦土と化した惨憺たる光景を目にしました。各地からの引き揚げでごった返す上野駅を乗り継ぎ山形へと向かいました。

七月十九日、一年五カ月ぶりで萩生駅へ着いたのが午前九時三十分頃だったと思う。駅前の理髪店にて整髪し、よれよれの服装で十二時頃我が家へ帰り着いたのでした。

「只今」と言うとき家の中から出て来た祖母が本当に孫本人かと身体を撫ぜられた記憶があります。家に入り仏前を見ると毎日陰膳を供えてお前の無事をお祈りしていたと言う。

私は一月生まれなので間もなく八十歳の誕生日を迎えます。八十年の人生の中僅か十八カ月程の体験でしたが、四回もの命の危険に遭遇し、よく

も生きてこられたものと今でも思いだします。

戦争に行く前は偏食だった私も、終戦を境に何でも食べられるようになり、また忍耐強くなり、少々なことでは物事に動じないようになったことなど、大変な体験をしたものだと思っております。

しかし今六十余年前の十八カ月を振り返り、幾多の人の殺傷現場を目撃し、二度とあのような惨状はあってはならない。恒久的に平和であるようにとの願いを新たにします。